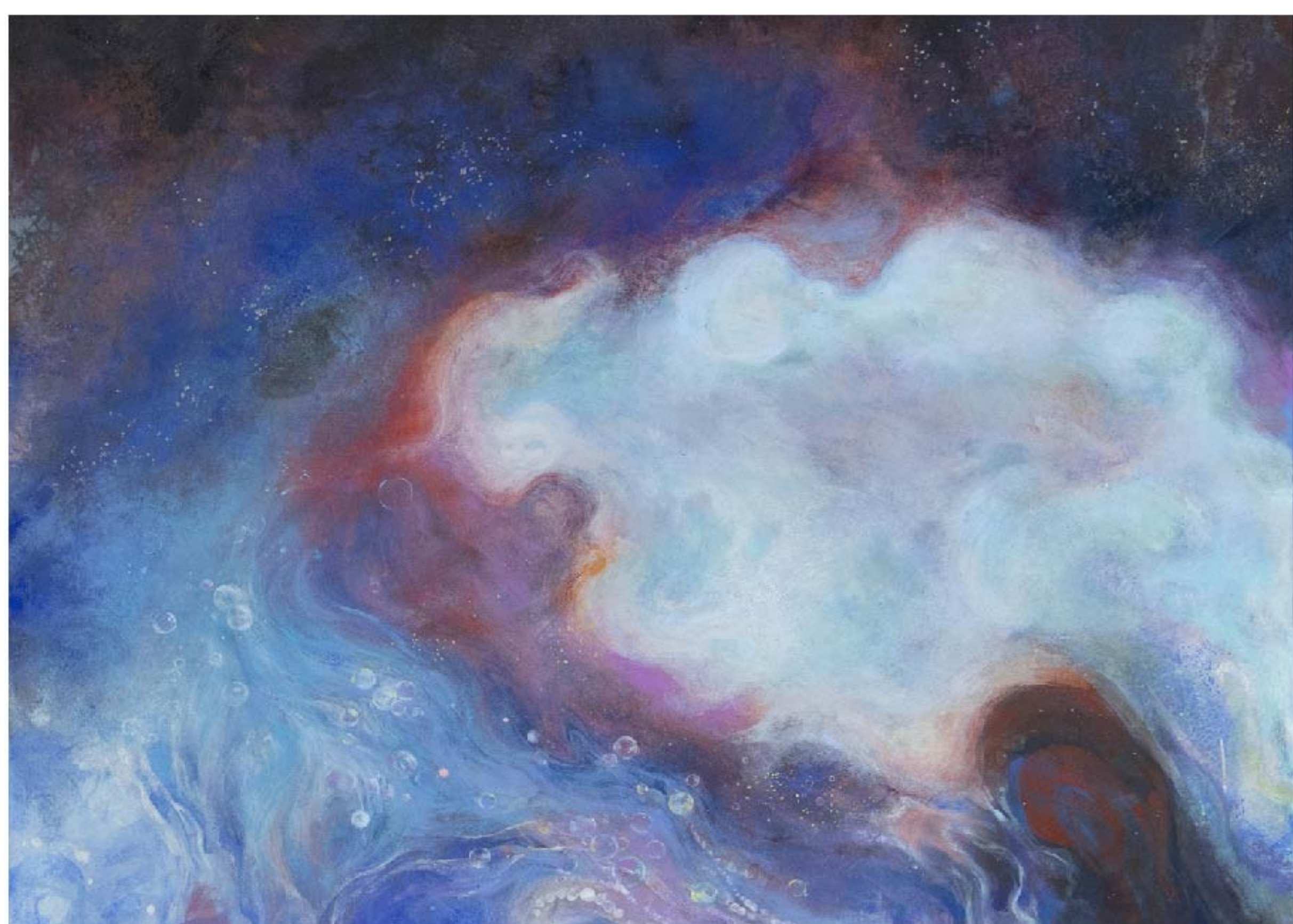


劉 佳緒
LIU JIAXU



クラインノツボ
紙本着彩



生々流転、宇宙の偶発的な恒常

宇宙を構成する物質はほとんど正体が不明で、我々人間が分かっているのは約 4.9% に過ぎない。その 4.9% におけるほんの一部に、生命が含まれている。地球最古の生命体といえ、約 38 億年前から生きているシアノバクテリアである。そして、アンモナイトは構造が複雑で長年に渡り繁栄したのに、白亜紀末期の隕石による打撃を受け、巨大な恐竜と一緒に絶滅した。生物の生息と絶滅は、生命誕生以来、延々と自然界に併存する。

人間という死を忌む習慣を持つ生物は、常に絶滅を悲劇に見なす。樹齢五千年を超える木にせよ、高々百年余りの人間にせよ、生命体でさえあれば、いつか生命活動の終止を迎える。生命について、老子は「出生入死（生に出でて死に入る）」¹⁾と述べている。生と死は、生息と絶滅は、生命の限界を示す自然現象で、良し悪しはない。

死について、荘子は穏やかな態度を表している。「真人は、生に執着せず、死をも忌避しない。この世に生を受けたからといって喜ぶこともなく、この世を去るからといって悲しむでもない。ただ無心に来たり、無心に去り行くのみである。自身の存在をも一個の自然現象とみなし、死についてあれこれと心を煩わさない。」²⁾と言っている。私は彼の言葉に感心しながら、自分はまだあれほど平静な境地に到達できていない。たまたま生きている生物(人間を含め)の多様な〈生〉と、彼らの魅力を深刻にさせる〈死〉の両方の存在に感動させられている。これが、生命を主題として絵を描く所以である。

自作の中で、私はコラージュとミクストメディアの手法を用いて、画面にアンモナイトの化石の造形を描いている。絶滅を象徴すると同時に、日本画の基礎的素材である岩絵具の無機性と、和紙や麻繊維などの有機素材の有機性を利用して、生と死の混沌を表現している。我々生物は有機と無機の共同作用の下で物質から誕生し、生きているうちにエネルギーを摂取したり、消耗したり、最後に物質に戻り、ほかの生命体のエネルギーになる可能性もある。これを、私は老荘思想における「混沌」であると理解している。私は絵画を通して想像上の生命体を創造するつもりではない。自分の理解する生命像の一部を再現するだけである。

1) 『老子』、第五十章

2) 『荘子』、大宗師